

氏 名	岩 井 沙 織
学位(専攻分野)	博士(歴史学)
学 位 記 番 号	博史甲 第13号
学位授与の日付	2016年 3 月26日
学位授与の用件	学位規則(昭和28年 4 月 1 日文部省令第 9 号) 第 4 条第 1 項該当
学 位 論 文 題 目	中世東国の「みち」の在り方とその復元
論 文 審 査 委 員	主 査 教 授 藤 原 良 章 副 査 教 授 北 村 優 季 副 査 教 授 手 塚 直 樹 副 査 東京大学史料編纂所教授 山 家 浩 樹

論 文 の 内 容 の 要 旨

岩 井 沙 織

中世の交通は、従来の研究において荘園制における交通に基づいた「都鄙間交通」として理解されていたが、近年では、地域と地域を結ぶ「地域間交通」と並立して機能したことが明らかにされつつある⁽¹⁾。ただ、このような理解は「基本的に中世後期にとどまっている」⁽²⁾と指摘されるように、前期における地域と地域を結ぶ交通の在り方を解明する研究は緒に就いたばかりである。よって、中世前期における「みち」⁽³⁾がどのような経路で、どのような在り方で、どのように維持され、またどのような役割をはたしていたか、多角的に検討し明らかにすることを急務と考え、序章において、本研究で検討する三つの課題を設定した。

まず、第一に、文献史料、考古学の成果に恵まれていない場所では、どのように「みち」を復元していくか、その方法を模索する必要がある。例えば、史料や考古学の成果以外から、中世の「みち」が通っていたことが考えられる指標を見つける必要があるだろう。第二に、複線性・変動性が中世陸上交通の大きな特徴であることが指摘⁽⁴⁾されているように、各地へ向かう経路についても様々なパターンを考えていく必要がある。第三は、中世において、宗教者や寺院が交通施設の整備・維持に関わったこと

は周知のとおりだが、なぜ宗教者が交通に深く関わりえたかについては、交通施設整備事業が、彼らにとっていかなる意味をもっていたかという視点での追求が重要と考える。以上の課題解決を目的にした本研究の構成と主な論点を次にあげていく。

第一章「下総東部における水上交通―香取内海地域と房総太平洋を結ぶ水上の東西ライン―」では、下総国東禅寺周辺が、香取内海と房総太平洋をつなぐ地域であったと想定し、両者を結びつける交通を地図上に復元した。下総藤原氏や北条氏、千葉氏といった各氏が、同寺周辺に展開した千田庄を重視した理由は、本章で検討した「みち」を含めた交通が大きく関わっていたと考えられる。

第二章「東禅寺から香取内海へ」では、東禅寺と香取内海を南北につなぐ陸上交通の解明を試みた。同寺の本寺、称名寺領経営や称名寺末寺との連絡、鎌倉への行き来を頻繁に行った東禅寺長老湛睿の活動が可能であったのは、本章で検討した「みち」や、第一章で検討した「みち」を含めた水・陸上交通が複合的に機能した結果と捉えた。

第三章「鎌倉と武蔵国東漸寺―鎌倉と東京湾沿岸地域を結ぶ中世の「みち」―」では、武蔵国東漸寺周辺に展開した複数の「みち」について検討した。東漸寺周辺が、東京湾沿岸地域へのアクセスにおいて重要な場所であり、このような場所に存在した同寺が北条氏、幕府にとってどのような存在と認識されていたかを提示した。

第四章「中世の交通施設整備事業と寺院」では、第三の課題の解決を試みた。そこで、取りあげたのが、鎌倉時代における交通施設整備事業を広く展開した極楽寺である。鎌倉時代最後の長老、俊海までの交通施設整備事業を検討することによって、同事業がどのような意識で行われ、中世の交通を支えていたかを提示した。

第五章「地域における中世交通の在り方―上・信境界地域における修験の道―」では、群馬県吾妻郡嬭恋村に残る修験関係の文書「下屋文書」を手がかりに、上・信国境付近において活動した修験者が、布教のために利用した陸上交通を復元することを試みた。本章で明らかにした修験の道は、東西にはしる東山道といった幹線道とは別に、同じく上・信を結ぶ道である。幹線道、非幹線道が複線的に通る境界地域における交通の姿が浮かび上がったといえよう。

第六章「白旗城と黒羽城の間」では、奥州との境界付近、那須に存在した白旗城周辺の交通について検討した。同城周辺には、鎌倉街道の宿駅栗野宿があったとされ、白河関方面へ通じる南北道が通ることから、交通の要衝とされてきた。しかし、同城周辺には南北道以外の道も想定でき、この道の果たした歴史的な役割について言及した。

第七章「ミノワ地名考」では、各地に同一地名が散在するミノワ地名について検討した。ミノワは、中世の城や館があった場所に多く見られる地名だが、従来からの理解のように、決して城や館に付随することによって発生する地名ではないこと、むしろ、同地名が武士の本拠をおくのにふさわしい特性を元々備えた場所であったことが考えられる。この特性の一つに、交通と密接な関係をもつことを指摘した。

第八章「中世における交通と丸子—丸子地名の特性を探る—」では、ミノワ地名と同様、中世の史料に複数登場し、現在日本の各地にみられる丸子地名の特性を探った。その結果、複数の「みち」の結節点となる同地名の共通性を明らかにした。更に、丸子が古代の丸子部に由来を求めることができ、古代からの交通の要衝を、中世が継承した場所であったとの見通しを得た。

終章では、全八章を振り返り、古代から継承された「みち」、中世になってつくられた「みち」、この両者が複合することにより、中世の交通が機能していたことを指摘した。そして、そのことを前提に、歴史に埋もれた「みち」を復元する研究を更に進めていく必要があることを提言した。

以上、序章において設定した課題の解決を試み、中世における「みち」の在り方、及び「みち」復元の方法を提示することができた。この方法は、本研究で取りあげていない、他の地域でも応用可能である。よって、本研究は、中世社会を成り立たせていたと言っても過言ではない「みち」を、より一層明らかにしていくための足がかりになる作業と位置づけられよう。

(1) 矢田俊文「中世水運と物流流通システム」(『日本史研究』448、1999年)、藤本頼人『中世の河海と地域社会』高志書院、2011年。

(2) 藤本前掲註(1)。

(3) 本研究では、陸上交通、水上交通、全ての交通をさす場合「みち」と表記する。

(4) 榎原雅治『中世の東海道をゆく—京から鎌倉へ、旅路の風景—』中央公論新社、2008年。

審 査 の 結 果 の 要 旨

岩井沙織氏から提出された博士学位申請論文は次のとおりである。

論文

中世東国の「みち」の在り方とその復元

中世における物や人の流れ、文化・信仰の伝播、合戦での軍勢の動き、これらすべてを考える上で、「みち」、そして交通の問題は大きく関わる。

これは、本論文の冒頭の一節であり、こうした観点から中世のみち、あるいは交通の問題について、その実態を明らかにしようとするのが、この論文の目的である。従来、中世の交通は荘園制に基づいた年貢輸送をになう「都鄙間交通」体系として論じられていたが、近年、中世考古学の成果により、むしろ「地域間交通」体系として認識されるようになった。本論文もそうした認識に立ち、新たな観点を切りひらこうとするものである。主な内容は以下のとおりである。

第一部「寺院と「みち」」は、地域の拠点となった寺院、あるいはそれが存在した場に注目する。

第一章「下総東部における水上交通」 中世、千田荘が存在した下総東部における河海、ラグーンなどを通じる水上交通の復元を行う。

第二章「東禅寺から香取内海へ」 称名寺長老にもなる湛睿が長老を務めていた下総東部の東禅寺（第一章でも言及）に注目し、香取内海をつなぐ陸上交通を明らかにする。

第三章「鎌倉と武蔵東漸寺」 北条氏一門の名越氏と関わり、梵鐘をはじめとした多くの文化財が残されている東漸寺（現、横浜市磯子区杉田）に注目し、鎌倉と武蔵国東京湾岸地域を結ぶみちの経路を明らかにする。

第四章「中世の交通施設整備事業と寺院」 鎌倉における西大寺流真言律宗の拠点、極楽寺による交通施設整備について、前田尊経閣文庫に伝わる紙背文書、「覚順書状」の分析から、先行研究の解釈の過りを指摘し、その実態に迫る。

第二部「地名・文書・城による「みち」の復元」は、史資料の限られた地域における道の復元を目指す。

第五章「地域における中世交通の在り方」 群馬県吾妻郡嬭恋村に残る修験関係文書に注目し、上・信国境付近において活動した修験者が布教のために利用したみちを地図上に復元する。

第六章「白旗城と黒羽城の間」 奥州との境界付近、那須野には白旗城が存在し、戦国期には、南流する那珂川対岸の黒羽城へと移転した。これまでも白旗城付近を南北道がとおり、市や宿が形成されていたことなどから交通の要衝として取り上げられてきた。だがそれでは城郭移転の契機はとらえられない、として、白旗城・黒羽城を貫く東西道の存在を明らかにする。

第七章「ミノワ地名考」 従来、城郭などと密接に関わる地名として説明されてきたミノワではあるが、実は城郭などが成立する以前から存在した地名である場合が多いことを指摘。むしろ、古代以来の官道などの陸上交通と、河川の水上交通の結節点であった事を明らかにし、ミノワ地名と城郭などとの関係は、城郭などの存在が原因だったのではなく、あくまでも結果であったとする。

第八章「中世における交通と丸子」 中世史料にも散見される丸子地名に注目、それが中世の交通と密接に関わっていたこと、のみならず、丸子が、遙か古代の丸子部に淵源を持つこと、それが「馬」とも密接に関連していたことなどを指摘する。

この研究の大きな特徴といえるものは、その方法にある。歴史学にとって基本的な史料である古文書・古記録といった文献史料は言うに及ばず、地図・地名・城郭・現地調査など、利用可能なあらゆる方法を駆使したことである。この論文は、その多くの場合、章末に膨大な図版が挿入されている。そのひとつが地図の一群であり、また現地で撮影された写真などの一群である。写真の多くを占めるものが、五輪塔・宝篋印塔・板碑などの中世の石造遺物であることも特筆できる。石は風化することはあっても、立派な中世の代弁者だからである。それらが密集するところには中世の文化・社会が存在したことの明白な証である。こうした方法を駆使してまとめられたこの論文は、方法的にも、また復元といった作業についても、今後のみち研究の大きな一石となることは疑いない。

以上の点から見て、審査委員一同は、本論文が博士学位申請論文として十分適格なものであり、博士学位を授与されるにふさわしいものと判定する。

2015年11月28日

主 査	青山学院大学文学部教授 藤 原 良 章
副 査	青山学院大学文学部教授 手 塚 直 樹
副 査	青山学院大学文学部教授 北 村 優 季
副 査	東京大学史料編纂所教授 山 家 浩 樹